

27G-am01

往時のメディアに現れた星一の評伝

○三澤 美和¹⁾(¹⁾星薬大・薬理)

歴史的人物の評価は、当時の新聞、雑誌などのメディアに書かれた記事が生き活きとそれを伝えてくれる。明治44年に星製薬株式会社ならびに星薬科大学(前身)を創立した星一に関する記事は、大正6年頃から登場し昭和24年頃に到るまで数十種が見出される。そうしたメディア記事から星一の実像に迫った。大正6年東京中央新聞に、星一が第一次大戦でドイツからの医薬品の流入が途絶えた状況で、必死の研究によってモルヒネ、キニーネなどのアルカロイドの製造に成功し、諸外国に輸出するに到ったこと、南米に広大な薬草栽培地を取得したこと。大正8年雑誌『黒白』には連載で、自己の将来を開拓するため米国に渡り、米国人邸宅で下僕をしつつ英語を学び、行商で得た金でコロンビア大学に入学し、経済、統計、法律を学び、卒業した星一のことを、沢山の挿話を交えて描かれている。その後、ドイツ新聞には星一がドイツ学術界のために莫大な寄付をしたことの賞讃記事。大正11年都新聞には未来の理想内閣の大臣たるべき人として星一を推薦した記事。東京時事新報、シアトル・タイムス、シカゴデイリーニュース等々にも、星一の卓越した時勢透視眼と識見、世界に類のない星製薬商業学校をつくったこと、国内外5万の特約店を擁して独特な家族的経営で東洋の製薬王として大活躍中であること。阿片事件がでっちあげられ、一代の奇才が社会から葬られようとしていることを惜しむ沢山の記事。昭和24年東京日々新聞は老骨を鞭打ち南米の土地開拓のため渡航する星一の記事が社会面全段を使って紹介されている。これらの記事を目にすると、星一が今も健在な如くその実像がさまざまな角度から描出されてくる。